

## 凡 例

本目録は、姫路文学館所蔵の金井寅之助文庫〈和本類〉の書誌目録である。

内容は、主に江戸・明治期の刊本、写本等、総数約 2, 0 0 0 冊である。

本目録は、日本十進分類法 (N.D.C.)<sup>\* 1</sup> によって分類している。古地図、絵図については別立てとした。分類内の排列は書名の 50 音順とした。

はじめに書名<sup>\* 4</sup>を掲げ、書名の別称を併記する場合 ( )<sup>\* 2</sup> を付した。冊数<sup>\* 3</sup>、編者・著者名<sup>\* 4</sup>、並びに校者<sup>\* 5</sup>、訳者名<sup>\* 5</sup>、刊年<sup>\* 6</sup>、書写年次<sup>\* 6</sup>、出版者を列記し、一部に注記をおこなった。最後に登録番号(※の後の番号)を加えた。

書名は原則として、原書名<sup>\* 7</sup>によったが書名のない場合及び主意内容を補記する場合は [ ] を付した。

注記は、欠巻の有無、叢書の一部であること、旧所蔵者等を注し、叢書等の場合は、その中に収められる書名を記した。また、蔵書印等、備考に類することを記したことがある。

別ファイルとして書名索引を付ける。

本目録の本文は、山本秀樹(岡山大学文学部大学院社会文化科学研究科准教授)が作成した。書名索引の構成並びに全体の印刷構成は河野雅子が担当した。

### 書名索引について

書名の 5 0 音順に排列し、各書名に読みかな、日本十進分類法 (N.D.C.) の分類、登録番号、目録における掲載頁を列記した。( ) は書名の別称を示す。複数の著作名を含む書名の場合、検索の便宜を図るために、適宜単独の著作としても挙げた。

### 〈詳細補足〉

\*1 『日本十進分類法 新訂 9 版』(社団法人日本図書館協会、1995 年新訂 9 版、1998 年第 6 刷)による。

#### 俳諧・俳句の分類について

本目録における 911.3「俳諧・俳句」の分類(911.31 芭蕉以前、911.32 松尾芭蕉、911.33 元禄期、911.34 安永・天明期、911.35 文化・文政・天保期)においては、それぞれの俳書がどの分類の時代・年代に近い出版・成立年代であるかという要

素のみで分類を決定した。

その理由は以下の通りである。

十進分類法は近代以降の図書を分類するために作られているため、版本の分類を行う場合に問題を生じる場合がある。

十進分類法の俳諧の下位分類は、近代の俳諧関係図書の出版が蕉門俳諧とその中興を中心とする文学史観によって行われたために、おのずとそのようなものになっている。しかし実際には江戸時代の俳書はそれ以外の時代にも毎年途切れることなく出版されている。

現分類のどこに収まるかわからない（しかもその門流・内容が必ずしもはっきりしない）俳書をどのように現分類に所属させるかが、目録作成の上で解決すべき必須の課題であり、目録作成者には自由に分類を設定する権限が与えられていたが、たとえば俳諧分野で名高い膨大な俳書のコレクションである天理図書館『綿屋文庫連歌俳諧書目録』（天理大学出版部、昭和29年）でも出版・成立年のみで分類されており、つまりは事実上分類は行われていない。

一々内容による分類を行わなければならないのであれば、今日的にはまったく無名と言ってもいい俳人・俳書についても一々研究検討を行わなければならないということになり、それではいつまでたっても目録は完成しない。『綿屋文庫連歌俳諧書目録』の措置は、目録ができることを重んじた極めて実際的効率的な措置であると思われる。

よって、本目録における俳書分類においても、原則としてそれぞれの俳書がどの分類の時代・年代に近い出版・成立年代であるかという要素のみで分類を決定した。

## \*2 書名の選択について

版本の場合、外題・見返し題・序題・巻頭内題・尾題（巻尾の内題）・柱題が異なることがめずらしくないため、原則としてすべての書名を採録し、そのうち代表的なものを書名として選択した。

外題を印刷した題簽は剥がれることがめずらしくないため、おおむね内題を選択したが、内題がなく、外題が書名であったりして、外題を選択するべき場合には外題を選択した（歌書等）。

### 書名のふりがなについて

書名のふりがなは、原本にふりがながある場合はそれによる。（江戸時代のかなづかいは、歴史的な変化の結果、旧かなづかいと合致するものではないことに注意されたい。）

原本にふりがながない場合、『国書総目録』により、『国書総目録』に見えない書名については、『国書総目録』に見える類似する書名の読み方を参考にして判断した。

\*3 本の大きさを表すのに略称を使用した。「大」は大本、「半」は半紙本、「中」は中本、「小」は小本、「横」は横本である。

帙に入れられている場合は「帙」、箱に入れられている場合は「函」を使用する。合帙・合冊の場合「他…冊と合…帙」「…冊を合綴…冊」のように記した。

\*4 原則、著者・作者の名が記載されている場合には必ずそれを記し、それがない場合に序者・跋者の名を記した。( )内は編者が補ったものである。

編者・著者名等を記すに際して、原本の記載のまま、号・氏・名の順で並んでいることがままあるので、注意されたい。たとえば林羅山(氏・号)が羅山 林信勝のようにである。

\*5 刊行年および書写年が書物に記されていない場合、「版」「写」とのみ記して、版本・写本の別を表した。刊行年・書写年不明の場合、序跋年・成立年などがわかる場合にはそれを記した。

\*6 版本は複数の出版者によって出版されていることが多く、出版者については通例、奥付から一番最後の出版者を選んで採録することになっている(最も重要な出版者(版木所有者)であることが多い)が、本目録では出版者が3人までなら全員を採録したことが多い。また、多くの出版者の中に姫路の出版者が入っている等、何らかの意味で注目すべき出版者がふくまれている場合、その出版者についても特例的に採録している。

\*7 たとえば題簽等を完備していても『源氏物語』の場合、巻名しかなく、書名がどこにも存在しないことが普通である。このような場合、すすんで〔 〕で書名を補った。

2019年11月29日詳細補足：山本秀樹(岡山大学大学院社会文化科学研究科教授)